

# 乳児の百日咳の発生動向

## — 日米比較からの考察

いずみ 泉                      のぶ お 夫

キーワード：百日咳，幼若乳児，発生動向，日米比較，DPT 3種混合ワクチン接種率

### 要 旨

百日咳菌の真の蔓延度は乳児でより正しく把握でき得る。米国では乳児の報告は罹患・死亡件数とも1980年代より漸増した。日本は近年，成人・思春期の報告件数は急増したが，乳児での増加はない。米国では早期接種が徹底し，未接種幼若乳児への偏りが大きい。日本は乳児期前半と後半の件数は同様である。後半は出生児数と報告形態を勘案すると日本の報告が多いと思われる。百日咳菌は日本でより循環し，母親はより多くが十分な抗体を保有し，幼若乳児は移行抗体で守られているが，早期接種の不徹底により乳児後半の罹患が多いと考察した。今後，母親の保有抗体の低下により，幼若乳児の重症罹患が増す可能性がある。その対策を考えておき，乳児だけでも全数報告とし，詳細な情報を得る必要がある。また，早期接種の一層の徹底が必要である。

### はじめに

思春期・成人の百日咳の報告件数は近年，各国で増加している<sup>1)</sup>。この増加には，免疫の減衰に起因する真の増加の部分と，非典型例の認識と検出法の変化による報告増の部分がある<sup>1)</sup>。その比重は，地域，時代で異なるが，死亡の危険もある幼若乳児の周囲には，現在，排菌者が少なくないことを意味する<sup>1)</sup>。

ワクチン未接種や初期接種未完了の幼若乳児の

感染の多くが家族を感染源とする<sup>2,3)</sup>。幼若乳児の百日咳の診断は容易とは限らないが<sup>4)</sup>，その発生状況は菌の真の蔓延度をより正しく反映し得る。乳児百日咳に焦点を当て，発生動向を日米比較から考察した。

### I. 日本の年齢層別の発生動向

**1. 乳児の動向** ワクチン時代は，人口当り百日咳罹患数が最多なのは乳児であり，関連する入院や死亡の大部分を占める。1999~2009年の全国の小児科定点への報告実数を年齢層別に図1 A, Bに示した(09年の乳児は552件，詳細は未)<sup>5)</sup>。乳児件数の全件数に占める割合は2000年の47%か

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科

連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613